

William Dean Howells とアメ リカの風景——*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へ

武田千枝子

William Dean Howells の作家としての出発点におけるイタリア体験が、その後の彼の文学に多大の影響を及ぼした事実はここで改めて指摘するまでもない。問題は初期におけるイタリア体験の意味である。Henry James はハウエルズのこの経験について「感受性が最も鋭敏で、感応力の最も強い年頃にヴェニスに住まいしたことは、ハウエルズ氏のために考えられるこの上ない幸福な出来事であったと言える」と述べている⁽¹⁾。この言葉からうかがえるように、若いハウエルズにとって観察の対象が粗野な、陰影に乏しいアメリカの風景ではなくて歴史的連想の豊かな、美しい風物に富むヴェニスであったということが意味深いのである。

中西部で育ちながら、ロマンティックなものに対するあらゆる期待に胸を躍らせ、ロマンティズムの色彩濃い詩を報われることなく書き続けていたハウエルズが、物事をありのままに見て書くことを学び、散文の道へと方向を定めるきっかけとなったのは、彼がヴェニスで書いた散文の小品を James Russell Lowell が認めてくれたことであった。⁽²⁾ それらはエッセイとスケッチで、後者は“Letters from Venice”として the *Boston Advertiser* に1863年3月27日から65年5月3日まで掲載されたものの一部であった。これらのスケッチは1866年にロンドンで *Venetian Life* として出版されたが、その2ヵ月後には

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches*へ
アメリカでも出版され、若いハウエルズに経済的な潤いをもたらした。それは
連載と出版の際に生じた障害が信じられない程の成功であった。

1867年に帰国して *Italian Journeys* (1867) を出したハウエルズは、その後
はじめてアメリカの風景に取り組み、the *Atlantic Monthly* の副主幹に就任
して以来住んでいたボストン郊外のケイムブリッジのスケッチを同誌に発表し
始めた。これはのちにまとめられて *Suburban Sketches* として1871年に出版
された。その直後に the *North American Review* に載ったローエルの書評
の中に次の評言が見出される。

Yes, truly these are poems, if the supreme gift of the poet be to
rim the trivial things of our ordinary and prosaic experience with an
ideal light.⁽³⁾

ローエルの賞讃の言葉は、しかし、この作品の問題点を見事に指摘している。
平凡で退屈なアメリカの生活の中の些細な事柄を理想の光に包んで提示する
——詩人としてのハウエルズのこの才能に当時の読者は想像力を刺戟されたに
違いない。⁽⁴⁾ だが、ローエルの言葉は、ハウエルズのイタリー時代からの、従
って完全に解決されてしまったわけではない文学上のディレンマ、詩か散文か
のディレンマを図らずも言い当てている。

イタリーでの生活を通して観察力と描写力とを培い、リアリズムの道を歩み
始めたハウエルズにとって、その道は決して平坦なものではなかった。彼がイ
タリーで体得した方法が確立されるためには、それが内包する矛盾点をアメリ
カの風景に直面して明確にする必要があった。その意味で、*Suburban Sketches*
は極めて重要な、興味深い作家の選択の問題を提示している。しかし、この問
題の萌芽はすでに *Venetian Life* に見られるのである。そこで、この最初の旅
行記に見られるロマンティシズムとリアリズムとの相克が、*Suburban Sketches*
において物語の枠組の中で劇化されてゆく過程を辿り、ハウエルズの小説家と
しての成長の端緒を明らかにしたい。

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches*へ

1861年から65年にかけてのハウエルズのヴェニス滞在の具体的成果の一つである *Venetian Life* は、その土地での彼の見聞を忠実に書き留めたものである。同時代のアメリカ人によるイタリー旅行記として注目されるものにGeorge Stillman Hillard の *Six Months in Italy* (1853), Charles Eliot Norton の *The Notes of Travel and Study in Italy* (1860),そして William Wetmore Story の *Roba di Roma* (1862) がある。ヒラードの書はイタリーの案内書としての性格を持ち、ノートンのそれはイタリーの宗教及び学問に対する東部知識人の反応を示している。ストーリーの書は長期滞在者としてイタリーの日常生活を克明に描いた、新しい傾向の旅行記として知られる。旅行者の眼ではなく滞在者の眼を通して書かれたハウエルズのヴェニスのスケッチは、ストーリーの旅行記に近い。取り上げられている対象は、オペラ、芝居、教会、絵画、祝祭日、冬の生活、食生活、ユダヤ人ゲットー、社交、そしてヴェニスの人びとの特質等あらゆる分野にわたっている。

ハウエルズの最初の旅行記に対する当時の英米の批評界の反応は、賞讃の言葉に彩られたものであった。従来の旅行記には見られなかったハウエルズの旅行記の特質をよく捉えた例をあげよう。

It is so easy to be extravagant and sentimental about Venice, and to blur your picture by the washes meant to soften it, that Mr. Howells's truthful touch, which leaves the charm natural and unexaggerated, is all the more admirable.⁽⁵⁾

これは、書き手をセンチメンタルにしやすいヴェニスを扱うハウエルズの誇張のない忠実な筆の運びを高く評価した書評である。事実に忠実な描写は、このスケッチを書くに際してのハウエルズの意図であった。*Venetian Life* の冒頭で、彼はヴェニスを描いたそれ以前の旅行記のセンチメンタリズムとは無関係であることを表明している。

I could not, indeed, dwell three years in the place [Venice] with-

out learning to know it differently from those writers who have described it in romances, poems, and hurried books of travel, nor help seeing from my point of observation the sham and cheapness with which Venice is usually brought out, if I may so speak, in literature.⁽⁶⁾

しかし、当時の書評がこの作品を旅行記のジャンルの史的展開の上で捉え、その秀れた特質を指摘するにとどまっている中で、数は少ないが、この作品自体の問題点に触れたものがある。一つは *the Contemporary Review* の1866年8月号に載った書評で、ハウエルズを “a genuine poet, with a loving eye for the beautiful, and the keenest sense of humour[italics mine]”⁽⁷⁾ と評したものである。他の一つは、同年9月8日付の *the Round Table* の書評で、ハウエルズのヴェニスはあるのままでの姿であるにも拘らず, “not...rigid in outlines or distasteful in aspect”⁽⁸⁾ であると述べ、それは書き手のその土地に対する愛情に因るものであると見做している。前者は先に引用した *Suburban Sketches* のローエルの書評に見られた美を愛するロマンティシズムの詩人としてのハウエルズの資質を指摘したものとして注目される。後者もこの視点に連なるもので、書き手の愛情がリアリズムを弱める結果となり、描き出されたヴェニス美しい姿を見せていることを暗示している。ハウエルズは対象を忠実に描出することを意図しながら、それに徹し切れなかったようである。先に引用した *Venetian Life* の冒頭の部分の前後を参照しながら、彼の曖昧な姿勢を詳しく見てみよう。

この作品の冒頭の部分は、いわばハウエルズ自身の知覚の様式の告白といってよい。彼は先ず Padua での芝居見物の体験を語る。⁽⁹⁾ 背景は粗悪で、小道具は実物とかけ離れ、プロンプターや道具係の動きと観客席を隔てるものもないその劇場は、演じられる美しい世界と雑然とした舞台裏とがともに存在している場所であった。しかし、彼はその舞台に真実と美を感じ取り、楽しむと

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へとが出来た。劇的な場面に不可欠なものと考えていた劇的背景は、必ずしも重要な条件ではないということを彼は教えられる。彼はヴェニスに対しても同じ姿勢をとった。とりわけヴェニスは、日常の平凡な生活に対する非現実的な夢の世界にも等しい都市である。たとえ、むさくるしい現実がここかしこの街角に顔をのぞかせていようとも、それらとはは無関係に、想像力の働きによって美しいヴェニスを彼は現出させることが出来た。これは現実をそのまま受容するのではなく、現実を想像力によって美化する姿勢である。そして、このセンチメンタルな姿勢に続いて、先の引用にある3年後の発見が来るのである。⁽¹⁰⁾ 3年間のヴェニス滞在中にその実像に触れる多くの機会を得た彼は、先輩のアメリカ人旅行者や文筆家の描くヴェニス像がセンチメンタルな、歪められたものであることを知る。彼はその一例として有名な嘆きの橋についての“the sentimental errors”をあげている。この橋が16世紀末になって建造されたものであるにも拘らず、ヴェニス共和国時代の残酷な政治機構と結びつけて考えがちだが、この橋を渡って牢獄へ送られたのは強盗や殺人犯であった、と語る。そして彼は誇張を排し、冷静に事実を語る、と繰り返し強調する。それにも拘らず、彼はアメリカ人として、ヴェニスの比類なき美しさに心を動かされることを否定しない。

At the same time, it has never lost for me its claim upon constant surprise and regard, nor the fascination of its excellent beauty, its peerless picturesqueness, its sole and wondrous grandeur.⁽¹¹⁾

ヴェニスの美 (picturesqueness) は主としてその歴史的な連想の豊かさを意味し、アメリカ人にとってはヨーロッパの他のいかなる国の魅力にもまして訴える力を持っていた。それは彼の想像力を刺戟してやまぬものであった。

センチメンタリズムを拒否しながらリアリズムにも徹し切れずに両者の併存を許すというこの型は、*Venetian Life* と *Suburban Sketches* とに流れている基調である。その軌跡は詩か散文か、ロマンティズムかリアリズムかの選

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へ
折の岐路に立つハウエルズのディレンマを示している。二つの作品はともに旅行記というよりはむしろ、書き手の特質をよく示すという旅行記の持つ自伝の性格の濃いものとして注目される。旅行記の書き手としてのハウエルズの特質はむしろ *Italian Journeys* の方に見られるように思う。⁽¹²⁾ 彼自身、第一作よりこの作品の方を好ましく思っており、⁽¹³⁾ 自らを “the emotional traveler”⁽¹⁴⁾ というように、事実に関する知識より個人的感情に彩られた旅行記である。

冒頭の告白のほかにも随所でハウエルズはその意図と方法について繰り返し述べているが、“Housekeeping in Venice” と題する第七章の冒頭は次の言葉で始まっている。

... I trust the reader will not disdain the lowly-minded muse that sings this mild domestic lay. I was resolved in writing this book to tell what I had found most books of travel very slow to tell, ... as much as possible of the everyday life of a people whose habits are so different from our own; endeavoring to develop a just notion of their character, not only from the show-traits which strangers are most likely to see, but also from experience of such things as strangers are most likely to miss.⁽¹⁵⁾

ここには平凡な日常生活をありのままに捉え、誇張を交えずに写し出そうとするリアリストの立場が明確に示されている。そうすることが、ヴェニスの人びとの性格をアメリカの読者に正確に伝える方法であるとの確信がある。しかし “the lowly-minded muse” や “the mild domestic lay” 等の言葉には、彼の描き出すヴェニスが高尚でロマンティックなものではなく、調子の低いありふれた現実であることを暗示する響きがある。また “I trust the reader will not disdain...” で始まる一文は、従来のセンチメンタルな視点を持つ旅行記が扱わなかった対象を描くことに対する彼の一抹の不安と、その不安をかき消そうとして自らを説得する姿勢がうかがえるのである。先に述べたように、この作品の随所で彼の意図を繰り返し述べるのも、読者に向けてのことという

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life*から *Suburban Sketches*へ
よりもむしろ、彼自身を納得させようとする結果であると考えられる。読者に
対するこの危惧は、当時の一般の文学趣味を考えれば当然のことであろう。
James D. Hart によれば、⁽¹⁶⁾ 19世紀中葉のアメリカ大衆小説の特徴は夢想と
感傷であり、大衆は現実の生活において実現不可能な理想の償いを小説に求め
ていた。また南北戦争当時及び戦後を通じて主流を占めていたのは宗教小説と
歴史小説であったから、たとえ、ローエルら親イタリー派の知識人の存在があ
ったにせよ、卑しい女神のうたう家庭の歌の響きに対しては大きな不安があっ
たことであろう。

ハウエルズがリアリスティックな方法を自分自身に対して納得させようとし
たことは、対象であるヴェニスそのものに対して彼の方法を適用し続けること
が出来るかどうかという点に関して不安を感じていたことを示している。ヴェ
ニスの持つ圧倒的な魅力が、それとは対照的なロマンティックな方法を、即ち
彼が背を向けようとしている方法を彼に強いるのではないかという懸念であ
る。そしてその結果は、当時の書評の指摘にもあるように、意図と完成した作
品との間のずれとなって現われている。ヴェニスは夢の世界の美しさを備えて
いる。それはともすれば観察者の目を曇らせ、その実体を捉えることを困難に
させる。夜の闇に包まれてその廃墟はさだかには見えず、冬の雪は時が遺した
荒廃の傷跡の醜さを包み隠してしまうのである。そして朧な光がかもし出す美
だけが強く印象される。そこでは事実が虚構、即ちありふれた醜い現実を美し
く変化させる月の朧な光、の前に力を失ってしまう。彼が直面した問題は、セ
ンティメンタルな反応を迫るこの picturesque な対象をいかにリアリスティッ
クに描くか、ということであった。次の例は彼の示した方法である。

... all the places had something rare and worthy to be seen : if
not loveliness of sculpture or architecture, at least *interesting squalor*
and *picturesque wretchedness* [italics mine]. ... ⁽¹⁷⁾

... being newly from a land where every thing, morally and mate-

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へ

rially, was in good repair, I rioted *sentimentally* on the *picturesque* ruin, the *pleasant discomfort and hopelessness* of every thing about me here [*italics mine.*].⁽¹⁸⁾

第一の例は、観察者の関心が彫刻や建造物のような興味をそそる美しいものではなく、“interesting squalor” と “picturesque wretchedness”——冬場は特に湿っぽい不潔な周囲の家——にあり、そしてそれらが美しいものと同様、見る価値があると述べている。うす汚れた眺めも、ヴェニスという背景の中では美しいものとして知覚されている。ここにみる矛盾形容法は、第二の引用に明言されているように、現実に対するハウエルズのセンチメンタルなアプローチを示している。このアプローチを Kenneth S. Lynn は “antiromantic romanticism”⁽¹⁹⁾ と呼んでいる。

ハウエルズのセンチメンタルなアプローチは、彼が “a land, where every thing, morally and materially, was in good repair” からの訪問者であるという事実にくらか関係がある。彼はスウェーデンボルグ信奉者の父を通して善悪の判断力を身につけていたが、ヴェニスの弛緩した雰囲気、無為の快感にその道徳的判断力を停止してしまう。盗みや背信等の腐敗と墮落に対する彼の反応は、道徳的ではなくて審美的である。それらもまた彼にとっては “interesting” で “picturesque” な画面を構成するものとして価値がある。Washington Irving や James Fenimore Cooper 等の建国時代の自意識の強いアメリカ人は、ヨーロッパの道徳的腐敗に対して自国の優越を殊更強調するのに忙しかった。しかしハウエルズの場合には、その優越感を同情あるユーモアに包んでしまうゆとりが生まれていて腐場である。召し使い Giovanna の下層階級特有の目に余る身びいき（第七章）や、旅費を貸し与えた作家の親切になおもうがろうとする ‘the Mouse’ 一家の依頼心の強さ（第十章）に対する彼の姿勢は、優越感を意識しながら相手に親切をかける種類のものである。

イタリーがアメリカ人に対して持つ魅力は殊のほか大きい。その魅力の本質

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches*へは常に芸術家や文人の分析の対象となっている。最後の章でハウエルズは審美的にも道徳的にもヴェニスの魅力の前に屈してしまった原因を分析する。抵抗し難いその魅力はこの土地の歴史の古さと無関係ではない、と彼は考える。

History, if you love where it was created, is a far subtler influence than you suspect; and I would not say how much Venetian history, amidst the monuments of her glory and the witnesses of her fall, had to do in secret and tacit ways with the prevailing sentiment of existence, which I now distinctly recognize to have been a melancholy one. No doubt this sentiment was deepened by every freshly added association with memorable places; and each fact, each great name and career, each strange tradition as it rose out of the past for us and shed its pale lustre upon the present, touched us with a pathos which we could neither trace nor analyze.⁽²⁰⁾

歴史を背負った個々の事実、人物、伝統が現在に朧な輝きを投げかけて、跡づけることも分析することも不可能な情念を我々の胸に呼び起こすのだ、と彼は結論する。歴史の光は月の光と重なり合って、政治的混乱と経済の衰退に喘ぐヴェニスの現在を美しく変貌させる力を持っている。ここに見られるのは、現実を逃れて過去の荘麗な暗闇に身を沈めるためにヨーロッパに渡ったワシントン・アーヴィングと同じ一人のロマンティスト・ハウエルズの姿である。*Venetian Life* は一方でリアリストを志しながら、図らずもロマンティストの実体を顕わしてしまうハウエルズの分裂した個性を映し出している。

Suburban Sketches はヴェニスに対する方法をはじめてアメリカの風景に適用した作品である。これはボストン郊外のケイムブリッジ（作中では Charlesbridge）の風物のスケッチであるが、純然たる旅行記として分類することはむずかしい。ある著書目録では短編小説の部類にいれられており、⁽²¹⁾ またある研究者はこれを“semi-fictions”または“sketch story”と呼んでいる。⁽²²⁾ 旅行記から物語へと筆を進めていった Nathaniel Parker Willis の“Drawn

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へ
Under a Thin Veil of Fiction” と但し書きのついた *People I Have Met; or
Pictures of Society and People of Mark* (1856) やヘンリー・ジェイムズの
“A Passionate Pilgrim” (1871) と同様、これもスケッチから小説への移行の
過程を示す作品である。翌1872年には最初の小説の試みである *Their Wed-
ding Journey* が出版される。

Suburban Sketches に着手した頃のハウエルズが直面していた問題は、ある
とすれば、何であったのか。二つの旅行記により成功をおさめた彼が、帰国後
アメリカの風景を描くことに何の抵抗も感じなかったであろうか。この間の事
情は、この作品を構成する個々のスケッチの進行状況により幾分明らかにされ
る。9編のスケッチはそのうちの1編を除いて、すべて the *Atlantic Monthly*
に掲載されたものである。その最も早いものは、1868年1月号に発表された召
し使いの黒人女ミセス・ジョンソンの人となりユーモラスに描く “Mrs.
Johnson” である。次に発表された “Doorstep Acquaintance” は、1年3カ
月の距りを置いて1869年4月号に載った。この間のハウエルズの動きを伝えて
くれるのが1869年2月4日付の友人宛の書簡である。⁽²³⁾ それによると、彼は
伝記や歴史関係の小品を執筆する計画を立てていたようであるが、資料不足の
ため断念せざるを得ず、“Mrs. Johnson” のような現代生活のスケッチを手が
ける以外に道がなかったようである。このことから当時の彼の関心が現在より
はむしろ過去にあったこと、即ちロマンティックな志向を有していたことがわ
かる。そして次善の策として現在を取り扱うことになっても、彼は作品の運命
に確信を抱くことが出来なかったようである。三番目のスケッチ “Jubilee
Days” が同じ年の8月に発表されるのを待つ間にジェイムズに送られた書簡
は、彼の危惧と希望とが入り混ったものになっている。

I'm writing now and have nearly finished something I call *A Pedes-
trian Tour*, and which is nothing but an impudent attempt to interest
people in a stroll I take from Sacramento Street up through the Brick-

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches*へ

Yards and the Irish village of Dublin near by, and so down through North Avennue. If the public will stand this, I shall consider my fortune made: and shall go on to write out a paper on *Pleasure Excursions* to different places in and near Boston. The *Nation* hasn't pronounced yet upon *Jubilee Days*—should it be adverse perhaps I shan't feel enough to go on.⁽²⁴⁾

この中で言及されている “A Pedestrian Tour” は、その後 the *Atlantic Monthly* の11月号に掲載された。“Jubilee Days” はこの書簡によると the *Nation* に送られたようだが、結局 the *Atlantic Monthly* に採用されたことになる。このような状況からみて、この時期のハウエルズは、これらのスケッチが編集者や読者に受け容れられるものかどうか判断出来ない状態にあったことがわかる。当時の一般大衆の文学趣味を考えれば、平凡な郊外散歩を描いて興味を惹こうとする試みは厚かましいというよりほかなく、彼はうしろめたい気持ちになったに違いない。しかし、1870年には、3、4か月おきに1編の割合で残りのスケッチが発表されていることを付け加えておく。

ヴェニスの実実を描写することに対して感じた不安がまたしてもここで現われる。彼が描こうとする郊外の風景はいかにも単調でむさくるしい。見渡す限り “a Slough of Despond” で、“a Delectable Mountain”⁽²⁵⁾ とてない茫漠たる眺めである。このような風景に直面した時、彼は最も安易な妥協として *Venetian Life* の方法を意識的に適用した。彼は、先ず、アメリカの中のイタリー、即ち picturesque な対象に眼を向けた。この傾向は、最初に発表された三つのスケッチに特に著しく、イタリー系の放浪者や物売り等、彼がヴェニスで好んで取り上げた “the primitive types”⁽²⁶⁾ が登場する。そしてこれらの人物に対する彼の関心は、多少の自嘲をこめて述べられているように “the sentimental interest... felt by the modern citizen of Charlesbridge”⁽²⁷⁾ である。次に彼は平凡な風景に対してロマンティックなアプローチを試みる。この点に関しては、彼が意識的に風景の空白を利用したと言えるのではないだろう

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches*へ。彼は散策が読者にとって退屈なものになりはしないかと懸念する一方、“their utter lack of interest amuses me”と断言し、殺風景な眺めを“a vast space upon which I can embroider any fancy I like as I saunter along”⁽²⁸⁾と見做している。“A Pedestrian Tour”から実例をあげよう。郊外の広い煉瓦置場はそれ自体想像力に訴えるものではないが、「私」（ハウエルズの分身と考えられる作家）はエジプトを連想してしまう。煉瓦を焼く竈から、聳え立つ寺院や王族の墓が容易に想像され、土を砕く製粉機は“those sad-voiced *sakias* or wheel-pumps which the Howadji Curtis heard wailing at their work of drawing water from the Nile”となり変る。⁽²⁹⁾ また骨董店の競売では、ガラスの花瓶から物淋しいニューイングランドの村に住む老嬢たちの身の上話を紡ぎ出し、マドンナの絵は、がらくたの積み上げられた店先を遠い美の国のドラマの舞台に一変させてしまう。⁽³⁰⁾

“A Pedestrian Tour”では、アメリカの風景に対する「私」のロマンティックなアプローチとそれに対する疑念との並置がこのスケッチに華麗な空想と衝撃の激しさとの対照を、そして劇的な起伏を与えている。ハウエルズは、アメリカの風景が所詮はイタリアの幻影あるいはそれ以下のものでしかなく、したがってロマンティックなアプローチを許さないアメリカ固有の風景があることを発見する。郊外のアイルランド人租界の共同墓地で「私」が遭遇した場面⁽³¹⁾は、センチメンタルな作家から現実を直視するリアリストへの姿勢の転換を強いる危機的瞬間である。あまり古くない墓をかき抱いて昨日の死を嘆くかのように泣き崩れる婦人の傍らでは、“some little ribald Irish boys”が“snatches of an obscene song”を歌いながら取っ組み合いの喧嘩をしている。婦人の泣き声と少年たちのざわめきが静まった後で、一人の老婦人が古い墓前で静かな祈りを捧げている。悲嘆にくれる婦人の姿をイタリアの共同墓地でみかけたのであれば、「私」は“an aesthetical observer”として強烈な印象を受け、センチメンタルな話を作り上げることも出来たであろうが、その種の連

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へ想を許さない背景の中では “a human being” としての反応を示しただけであった。作家は自身の反応の原因を分析し始める。センチメンタルな気分になれなかった第一の原因はアイルランド系少年の存在である。アイルランド系移民とイタリーの下層階級との間には類似点が認められるとはいっても、それは表面上のことではない。両者の間には、極めて古い文明を有する民族と6世紀にわたる迫害を受け粗暴な姿を最近現わした民族との間の相違がある。このように、アイルランド人に対するイタリー人の優越をその文明の古さ、歴史にあるとみるのは *Venetian Life* の結論と同様である。洗練と美の歴史の差がハウエルズに一方を許容させ、他を拒ませる。彼にとってアイルランド人の問題は、彼らのケイムブリッジ地区への大量移住によって深刻な環境問題となっていたことがジェイムズ宛の書簡から推測される。⁽³²⁾ 先の引用文に見られる “ribald” と “obscene” の語は、審美的、道徳的、精神的退廃を意味する。のちに取り上げる “Scene” においても、都市生活の醜い現実を象徴するものとしてアイルランド系の少年たちの叫び声が重要な役割を果している。

黒人の問題もまたアメリカ固有の風景としてハウエルズに現実的な対応を迫る。ミセス・ジョンソンを求めて黒人街を行く作家夫妻には、アメリカの若い時代にその人質となり、いまだに公正な扱いを受けていないこの種族に対して償いの義務があると感じられる。ミセス・ジョンソンの扱い方には Giovanna の場合とは明らかな相違がある。素材としてのミセス・ジョンソンは、彼女のイタリーの前任者と同様、善悪のけじめのない、しかし愛すべき “lowly folk in elder lands”⁽³³⁾ を想い起こさせる人物である。彼女は黒人の白人に対する優越を強調し、自分の皮膚の色について興味ある解釈を披露する。白人は癩病で漂白されたのである。しかし、彼女の子孫も次第に白人と同じ皮膚の色を持つようになる筈である。

I would not make a wanton jest here of Mrs. Johnson's anxiety to claim honor for the African color, while denying this color in many

of her own family. It afforded a glimpse of the pain which all her people must endure, however proudly they hide it or light-heartedly forget it, from the despite and contumely to which they are guiltlessly born; and when I thought how irreparably was this disgrace and calamity of a black skin, and how irreparable it must be for ages yet, in this world where every other shame and all manner of wilful guilt and wickedness may hope for covert and pardon, I had little heart to laugh.⁽³⁴⁾

Olov W. Fryckstedt はこの箇所を、イタリー旅行記の方法をアメリカの風景に無差別に適用することに対する「最初の警告」であると指摘する。⁽³⁵⁾

Giovanna の場合には、彼女のごまかしや言い拔けに鷹揚な態度で接し、道徳的判断を停止していたハウエルズが、ミセス・ジョンソンの矛盾に対してはこれをユーモラスに扱うことさえためらっている。アメリカ黒人の運命に対して罪悪感を抱き、その背後の問題の根深さを改めて認識した彼は現実の重圧に堪えている。旅行者であれ滞在者であれ、その土地に根を持たぬ者は、芸術作品を鑑賞するような態度で人生に接することが許されるが、自国の問題は趣味の尺度だけでは解決されない。それは個人の全存在にかかわる問題となる。

先にあげた墓地の場面は *Suburban Sketches* における一つの転機をなしているが、郊外の散策者「私」にとって、アメリカの風景へのアプローチは、繰り返し選択を迫る問題として残る。“By Horse-Car to Boston” は、アメリカの風景が文学の素材に適しているか否かの点につき自問自答を繰り返す作家の姿を描く。ボストンからチャールズブリッジへ向う乗合馬車の窓から眺める夕日にヴェニスを連想する人びとがいるが、自分にはそのような連想は不要である、と彼は先ず述べた後、「ボストンは他の素晴らしい眺めとの比較を全く必要としないほど美しいと思う」⁽³⁶⁾ という、おそらくアメリカの風景に対する最初の肯定的な見解を明らかにする。しかし、と彼は続けて「結局、人間は愚かなものであるから目に見える美しい風景に多少の伝説的魅力を、ふたしかな

William Dean Howells とアメリカ風景の一 *Venetian Life* から *Suburban Sketches* へ古さの魅力を求めるのだろうか」と問い、純真なアメリカ人を毒してその感傷癖を喜ばせるヨーロッパの害を指摘する。⁽³⁷⁾ 彼はアメリカ人が自国の過去に関心を向けるべきだと考える。しかし、だからといってアメリカの過去に溺れるならば、彼自身をも含めた現在を軽視することになる。“We healthy-minded people in the horse-cars are loath to lose a moment of it [the present]. . . .”⁽³⁸⁾ という言葉には、ヨーロッパからアメリカへ、過去から現在への彼の遍歴が現在に対する健全な認識へと到達しつつあることをうかがわせるものがある。そして、これ以後のスケッチでは感傷的な目は次第に姿を消し、平凡な日常生活の断面を直視しようとする傾向が現われてくる。それは、スケッチの発表の間隔が狭まってくる時期と一致している。⁽³⁹⁾

アメリカ生活の断面を扱ったスケッチの中でとりわけ注目されるのは、“A Romance of Real Life” と “Scene” の 2 編であろう。前者は 1870 年 3 月、後者は 1871 年 1 月の発表であるから、一連のスケッチの中ではともに後期に属し、それだけ物語の要素が濃厚である。特に重要な点は、物語の枠外に位置する語り手と物語内部の中心人物とを対置させ、現実に対する二つのアプローチの問題を小説の技法を用いて提示していることである。“A Romance of Real Life” は語り手「私」が物語の中に時折姿を見せながら、雑誌寄稿家の体験を語るという形をとっている。ある晩、娘を深している Jonathan Tinker と名乗る男が寄稿家を訪れる。船乗りである彼は、2 年間の航海から戻ったばかりで、その間に離散してしまった家族との再会を求めている。彼に同情した作家が娘を探しあてた時、その話は偽りであることがわかる。彼は重婚の罪で刑務所に入っていたため、家族は身を隠して彼に会いたがらないということであった。作家は、Tinker が誇張もせずに作り話を語ってきかせた想像力に感嘆するばかりであった。この寄稿家の信条は、自分が直接知り得る範囲内の意外な出来事を適切に処理することによって素材の持つ文学的興味を開発すること、それは巧妙な作り話をも凌ぐ筈である、というものである。この考え方の基礎

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へにあるのは、事実に対するロマンティックな解釈である。船員だという Tinker と娘を探して夜の町を歩く彼には、見馴れた筈の場所が新たな様相を呈しているように思われる。真相が判明して “the wreck of his romance” に直面しても、この作家は Tinker の人間的評価は下がったが、文学的価値は上がったとしか考えられない。語り手の立場は作家のそれと対立する。更に言えば批判的である。語り手から見れば、この作家は “one accustomed to value realities only as they resembled fables”⁽⁴⁰⁾ であり、Tinker が、真相を知った作家の前に遂に姿を現わさなかったことによって、この不可思議な出来事はそれにふさわしい不可思議な形で終結したのである。これは、あまりにも現実のロマンティックな局面、即ちその文学性を強調し過ぎて実体を把握出来ずに終る危険性を教える作品である。

“Scene” は “A Romance of Real Life” の主張をより簡潔に凝縮した作品である。ここでは語り手が全く物語の中には姿を見せず、一貫して隠れた存在となっている。彼の語るのは、同じ雑誌寄稿家が遭遇する若い娘の溺死体捜索の場面である。この作品では寄稿家が “this fiction-ridden age, when we must relate everything we see to something we have read”⁽⁴¹⁾ を代表する作家として提示されている。彼は溺死に追いやられた娘の不幸の原因についてロマンティックな想像をめぐらすか、結果は醜い現実を彼に暗示するだけである。そして彼の結論は、文学に描かれた水死——Zenobia の水死が Coverdale に残した印象、即ち自殺がいかに醜いものであるか、ということであった。水死体を運搬する場面を描いた最後のパラグラフには寄稿家の姿はなく、専ら語り手の声だけがきこえる。

In the bottom of the cart lay something long and straight and terrible, covered with a red shawl that drooped over the end of the wagon; and on this thing were piled the baskets in which the grocers had delivered their orders for sugar and flour, and coffee and tea.

As the cart jolted through their lines, the boys could no longer be restrained; they broke out with wild yells, and danced madly about it, while the red shawl hanging from the rigid feet nodded to their frantic mirth; and the sun dropped its light through the maples and shone bright upon the flooded flats.⁽⁴²⁾

この語り手の声は、結論までも文学作品の言葉でしか語れない寄稿家の姿勢に対する批判を何よりも雄弁に語っている。水死体は美醜を表わす審美的な言葉ではなく、“long,” “straight,” “terrible,” “this thing,” そして “rigid” のような即物的な言葉を用いて描写されている。感情を交えず、対象だけを凝視した乾いた表現は、Lynn も指摘しているように、⁽⁴³⁾ Stephen Crane の筆致を、ひとり水死体として浜辺に打ち上げられた給油係や、大火傷を負った黒人ジョンソンを描くクレインの筆を想起させる。この遺体を取り巻く状況を表わすものとして、雑貨商の荷物運搬車と、共同墓地に響いていた声と同じアイルランド系少年たちの狂気じみた叫び声が配されている。娘の死は、それに全く無関心な市民の平凡な日常生活と隣り合っており、その現実は粗野で醜い。また、娘のつけていた「赤いショール」についての言及が2回ある。その意味について考える前に、このスケッチの冒頭で与えられる水死事件のあった日の描写に戻ってみよう。それは “loveliest autumn morning” で、瀉には “the swollen tide” がひろがって、作家の散歩道には楓が黄色く赤く色づいて輝いている。アイルランド系住民の醜い家屋も気にならぬ程の穏やかな静けさに満ちた日である。これは、若い娘の水死事件という騒々しい出来事を予想することが不可能な状況である。しかし、この不幸な事件は実際に起こった。そして娘は生命のない物体と化してしまった。一方自然はどうであろうか。太陽の光は “bright” に “the flooded flats” を照らしている。自然は人間の死に微動だにしていな。その豊かな姿を誇ってさえいる。この対照は現実のきびしさを示している。「赤いショール」は若い娘のこの美しい秋の日を彩ってくれるものであったに違いない。しかし娘が死んだ今、それもただ空しく垂れ下がって、非情な

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches*へ
現実を象徴するものになっている。死は決してセンチメンタルなものではなく、このように苛酷な現実の、生の一部なのである。この一節は極めて短いものであるが、ただひたすら現実を凝視して人生の実体を把握しようとするきびしいリアリストの目を示していささかの無駄もない。この時期のハウエルズの一つの到達点と言えるであろう。

これら二つの作品に見られる一人称の語り手と寄稿家の対立の意味するものについて考えてみよう。この寄稿家は他のスケッチの語り手である一人称の作家と同一人物と考えられる。“By Horse-Car to Boston”では、この作家は、乗合馬車に同席した想像力をかき立てる一人の婦人について想像をめぐらすことを楽しむ。そして彼女の下車でロマンスを組み立てることが不可能になると、彼女に関する醜い事実が発覚して失望を味わうよりはよいと自らを慰めている。したがって、“Mrs. Johnson”など最初のいくつかのスケッチの一人称の作家兼語り手が直面しているディレンマが、“A Romance of Real Life”と“Scene”の二つのスケッチでは、ロマンティックなアプローチを採る寄稿家と、それを批判する語り手とに分担されている、と考えることが可能である。Carrington は、この寄稿家を当時の一般の寄稿家とみて、ハウエルズがこの寄稿家の姿を通してセンチメンタリズムの風潮を批判しているのだ、と述べている。(44) この解釈は正しいが、比較的早く発表されたスケッチの作家兼語り手のディレンマを考慮に入れるならば、寄稿家の中に、ロマンティックなアプローチと訣別し切れずにいたハウエルズ自身の姿をも描き込むことによって、彼自身をも含めた当時の作家のセンチメンタリズムへの傾斜を批判していると考えるのがより妥当であろう。こうしてハウエルズは、分裂した彼自身の個性を物語の主人公と語り手との関係によって劇化しているのである。

Suburban Sketches は、ハウエルズがヴェニスで学んだ方法をアメリカの風景に適用することが可能か否かを試す実験であった。そして、それはロマンティックなアプローチとリアリスティックなアプローチとの並存を証明する結果

William Dean Howells とアメリカ風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へに終っている。彼は、想像力による彩色を許す風景、即ち空白の背景にはロマンティックなアプローチを、想像力の働きを拒否するより粗悪な現実に対してはリアリスティックなアプローチを試みている。この作品が発表された直後、ジェイムズはチャールズ・エリオット・ノートン宛の書簡⁽⁴⁵⁾で、ハウエルズのリアリズムがロマンティックな方法から脱し切っていないことを見抜き、彼がこの方法を引き続き用いるならば、“richer and fairer things” に富む土地こそ彼にふさわしい場所であろうと述べている。肉眼で捉えた対象を描くタイプの作家であるハウエルズの描写力は、イタリアの豊かな風物によって養われた。この点に彼のイタリア体験の意味があるのだが、その想像力が空白の風景を埋める華やかな色彩の刺繍糸に過ぎず、“a really grasping imagination” ではないことをジェイムズは知っていた。しかし、これらのスケッチには、二つの方法の間で選択を迫られているハウエルズを批判する目が働いていることを読者は感じる筈である。

Suburban Sketches において試みられた物語の手法、即ち語り手と中心人物との対置は次の作品 *Their Wedding Journey* において再び用いられている。物語の内外に姿を見せる一人称の語り手に配して Basil March 夫妻がある。彼らはニューヨークからナイアガラを経てカナダへ入り、ケベックまで旅をしながら、目に触れるアメリカ大陸の風物の印象を語る。マーチ夫妻の視点は同一の視点ではなく、ハウエルズの経験を共有する夫バジルのリアリスティックな視点と、純粋なボストン人である妻イザベルのセンチメンタルな視点とに分裂している。二つの視点は、同じ風景に対して同時に共感し合ったり、正反対の反応を示して反撓し合ったりする。この視点の交錯による対立から生じる夫婦間の緊迫した状況が、平凡なアメリカの風景に陰影を与え、画面が平板になることからこの作品を救っている。語り手とマーチ夫妻との関係は、先の二つのスケッチにおける語り手と寄稿家との関係に等しいが、この小説の語り手はスケッチの語り手と異なって、他を批判するだけではない。彼は自己の文学

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へ
 的立場、リアリストとしての信条⁽⁴⁶⁾を明確に打ち出しながら、総じてセンチ
 メンタルなマーチ夫妻に対して同情ある理解を示しているのである。モン
 リオール寺院の物乞いの姿にイタリアの乞食を想像する夫妻を語り手は
 “those absurdly sentimental people, whom yet I cannot find it in my heart
 to blame for their folly”⁽⁴⁷⁾と呼び、アメリカの風景をヨーロッパのそれに
 結びつけなければ満足出来ないのは何故であろうか、と問う彼らの気持を推測
 して “this guilty couple”⁽⁴⁸⁾と呼ぶ。その信条と心情との間の矛盾を曝け出
 してしまう彼自身もまたディレンマに苦しんでいる。互いに相対立する存在で
 あるばかりでなく、それぞれが対立を内包する存在として語り手とマーチ夫妻
 の対置がこの作品に劇的な起伏を与えている。リアリストとしての出発を志し
 たハウエルズは、絶えずロマンティズムとリアリズムとの選択の岐路に立っ
 いたと言っても過言ではない。彼がロマンティズムと完全に訣別出来るの
 は、*Suburban Sketches* における危機的瞬間からかなり時を距てて、*Indian
 Summer* (1886) においてのことである。彼にとってリアリズムの道は決して
 平坦なものではなかったのである。

註

- (1) Henry James, “William Dean Howells,” *Henry James: The American Essays*,
 ed. Leon Edel (New York: Vintage Books, 1956), p. 174. This essay originally
 appeared in *Harper's Weekly* (June 19, 1886).
- (2) James Russell Lowell によって認められた散文の小品は、the *North American
 Review* のためのエッセイ “Recent Italian Comedy” と、the *Boston Advertiser*
 に載った「ヴェニス便り」であった。“Letter to William Dean Howells (July 28,
 1864),” *Letters of James Russell Lowell*, ed. Charles Eliot Norton (New York:
 AMS Pr. Inc., 1977), I, 338; “The Turning Point of My Life,” *Criticism and
 Fiction and Other Essays*, ed. Clara M. Kirk and Rudolf Kirk (New York:
 New York Univ. Pr., 1959), pp. 353-362.
- (3) James Russell Lowell, “Review of *Suburban Sketches*,” the *North American
 Review*, CXII (Jan., 1871), 236.
- (4) Cf. James Russell Lowell, “Letter to William Dean Howells (May 12, 1869),”

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へ
Letters of James Russell Lowell, II, 32.

この書簡の中でローエルは、*Suburban Sketches* に収録されている “My Door-step Acquaintance” を読んで Miss Norton の言葉を伝えている。“The pretty pictures in it come up before me... and I am not quite sure that whether Cambridge is in Italy—though, now I think of it, I know Italy is sometimes in Cambridge!”

- (5) George W. Curtis, “Review of *Venetian Life*,” *Harper’s Monthly*, XXXIII (Oct., 1866), 668.
- (6) William Dean Howells, *Venetian Life* (New York: AMS Pr. Inc., 1971), p. 10.
- (7) Anonymous, “Review of *Venetian Life*,” the *Contemporary Review*, II (Aug., 1866), 594-595.
- (8) Anonymous, “Review of *Venetian Life*,” the *Round Table*, IV (Sept. 8, 1866), 90.
- (9) *Venetian Life*, pp. 9-10.
- (10) 註(6) 参照。
- (11) *Venetian Life*, p. 10.
- (12) Cf. Henry James, “Review of *Italian Journeys*,” the *North American Review* (Jan., 1868), reprinted in *Literary Reviews and Essays by Henry James*, ed. Albert Mordell (New Haven, Conn.: College and Univ. Pr., 1957), pp. 198-202; James L. Woodress, Jr., *Howells and Italy* (New York: Greenwood Pr., 1969), p. 72.
- (13) William Dean Howells, “Letter to M. M. Hurd (Feb. 4, 1869),” *Life in Letters*, ed. Mildred Howells (New York: Russell and Russell, 1968), I, 153.
- (14) William Dean Howells, *Italian Journeys* (Boston: Houghton, Mifflin and Co., 1901), p. 16.
- (15) *Venetian Life*, p. 94.
- (16) James D. Hart, *The Popular Book: A History of America’s Literary Taste* (Berkeley: Univ. of California Pr., 1963), pp. 104, 117-118, 121.
- (17) *Venetian Life*, p. 33.
- (18) *Ibid.*, p. 37.
- (19) Kenneth S. Lynn, *William Dean Howells: An American Life* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1971), p. 147.
- (20) *Venetian Life* p. 414.
- (21) *William Dean Howells: A Bibliography*, compiled by Vito J. Brenni (Metu-

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へ

- chen, N.J.: The Scare Crow Pr., Inc., 1973).
- (22) George C. Carrington, Jr., *The Immense Complex Drama* (Columbus, Ohio: Ohio State Univ. Pr., 1966), pp. 158, 166.
- (23) William Dean Howells, "Letter to M. M. Hurd," *Life in Letters*, I, 153-154.
- (24) William Dean Howells "Letter to Henry James (June 26, 1869)," *Life in Letters*, I, 144.
- (25) William Dean Howells, *Suburban Sketches* (New York: Hurd and Houghton, 1871), p. 61.
- (26) *Venetian Life*, p. 35.
- (27) *Suburban Sketches*, p. 41.
- (28) *Ibid.*, p. 61.
- (29) *Ibid.*, p. 62.
- (30) *Ibid.*, pp. 77-81.
- (31) *Ibid.*, pp. 64-67.
- (32) William Dean Howells, "Letter to Henry James (June 26, 1869)," *Life in Letters*, I, 142.
- この点に関しては, *Suburban Sketches* からほかにも例をあげることが出来る—"the aggressive and impudent squalor of an Irish quarter" (p. 20), "the spiritual desolation occasioned by the settlement of an Irish family in one of our suburban neighborhood" (pp. 70-71).
- (33) *Suburban Sketches*, p. 30.
- (34) *Ibid.*, p. 26.
- (35) Olov V. Fryckstedt, *In Quest of America: A Study of Howells' Early Development as a Novelist* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Pr., 1958), p. 87.
- (36) *Suburban Sketches*, p. 107.
- (37) *Ibid.*, p. 108.
- (38) *Loc. cit.*
- (39) "By Horse-Car to Boston" は, スケッチ発表の間隔が狭まってくる 1870年に入って最初に発表された (1月)。本論25頁参照。
- (40) *Suburban Sketches*, p. 189.
- (41) *Ibid.*, p. 191.
- (42) *Ibid.*, p. 194.
- (43) Kenneth S. Lynn, *op. cit.*, p. 203.
- (44) George C. Carrington, Jr., *op. cit.*, pp. 33, 54, 60.
- (45) Henry James, "Letter to Charles Eliot Norton (Jan. 16, 1871), *The Letters*

William Dean Howells とアメリカの風景—*Venetian Life* から *Suburban Sketches* へ
of Henry James (1920), ed. Percy Lubbock (New York: Octagon Books, 1970),
I, 30.

(46) William Dean Howells, *Their Wedding Journey* (Bloomington: Indiana Univ.
Pr., 1968), pp. 3, 55.

(47) *Ibid.*, p. 125.

(48) *Ibid.*, p. 126.